

お忙しくても、約2分間で読めます

山内公認会計士事務所

ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895
FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

ものづくりをする意義は何か、「自分たちのバリューは自分たちでつくる」

小川 昌寛 (安川電機社長)

- 産業用ロボットなど自動化に資するものへの世界的な需要はへこまないと見ています。自動化はいわゆる「省人化」であり、コストダウンだと思っている人がこれまでは多かった。自動化によって「何人従業員を減らせるのか」「投資コストはいくらか」という考え方です。しかし自動化を一時的なコストの観点だけで捉えるのは、もはや時代遅れです。
- 設備を自動化する価値はコストを減らすだけではなく、生産性の向上です。人間による生産は、応用力と柔軟性は最強かもしれませんが、対応する人間はやがて変わります。人間の経験値の伝承も難しいです。一方、工場を自動化すると、すべての状態がリアルタイムに可視化されます。それが生産におけるロスを最小化させ、持続性の観点から考えると、人間よりも生産性は向上します。
- 私は「自分たちのバリューは自分たちでつくるものだ」と考えます。製品の設計はするけど、製造は外部という構図はそもそもおかしい。自分たちのコア製品を自分たちでつくることに価値を付けていく。それが私たちの生きる道です。

(参考:「日経ビジネス」2024年1月15日号)

経営者のための理念・哲学

自責か他責かは大きな差になる

田口 佳史 (東洋思想研究家)

- 経営が円滑に進まず業績も下降線をたどっているような会社には、共通して同じ病巣があるということです。それは「他責の社内風土」です。他責とは、失敗の原因を他人のせいにしてしまうことです。日本を代表する大企業や名門企業も、業績が上向かない原因を追究していくと、企業風土、企業文化としてのこの「他責」という組織の特性が出てくるのが、実に多くありました。
- 「あいつが悪い、こいつが悪い」と言っているうちに、真なる原因の解明にはなりません。視線を他人から自分に向けるのは容易なことではありませんが、ここが要点なのです。他責では直しようがありません。自責になり、「自分の何がいけないのか」となって始めて「自反内省」となり、改善改革に向かって進み出すのです。「自責」こそ成功の秘訣とあってよいでしょう。

(参考:「致知」2024年3月号)

経営者のための危機管理

「本当のことを言わない」企業社会の暗黙のルール

金田信一郎 (作家・ジャーナリスト)

- 日本社会はこれまで、「空気を読む」ことが必要な能力だった。そんな組織内で出世してきた日本の社長は、社員が「思ったことを言う」なんて、とても許容できない。だって、自分は言いたいことを堪えて出世してきたわけだから、そうしているうちに「やりたいこと」が分からなくなっていく。だが、もう限界だ。「本当のことを言わない」という企業社会の暗黙のルールが、今日、巨大な不祥事として露呈しているからだ。
- つまり、今起きている巨大な企業不祥事は、もとを正せば、すべて「こうやるべきだ」と言えない人々の集団が引き起こしている。つまり、電通もビッグモーターもジャニーズ(とテレビ局)も、現場が「やるべきこと」を考え、実行していれば起きえなかった事件なのだ。だが、長年の慣行が、とんでもない企業体質と業界慣行を築いてしまった。

(参考:「週刊東洋経済」2023年12月23日・30日号)

古典に学ぶ

問題にはすぐ対処する

- たとえば、目の前でトラブルが起きているのに対処せず、状況分析や原因探しにひたすら時間を費やす。あるいは、望まぬ事態に「これではいけない」と思いながらも、他者を責めたり、自己否定したりして、もんもんと日々を過ごす。そんな状況をよく見かけます。
- いうまでもありませんが、問題にはすぐに対処しなければなりません。そうしなければ、気がついた時には抜き差しならない状態になってしまう場合もあるでしょう。

(参考:名取芳彦監修「空海 道を照らす言葉」:河出書房新社)